

公益事業レポート 2010

遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞 授賞



「すべての人びとのいのちと環境のために」



すべての人びとのいのちと環境のために

このたびの東日本大震災により亡くなった方々のご冥福を祈り、被害にあわれた方々にこころよりお見舞い申し上げると共に、被災地の復興を祈念いたします。

2011(平成23)年3月11日。

未曾有の規模で東日本大震災が発生しました。4月6日に予定した120周年記念式典及び祝賀会は、多数の尊い命が失われた深い悲しみのなかで中止と決定し、被災者の医療支援に少しでもお役に立てていただくため、「自治医科大学医学部同窓会東日本大震災支援プロジェクト*」の趣旨に賛同し、3月末日両法人連名で500万円の資金援助を行いました。

今後の歴史に特筆されるであろう今回の震災は、日本社会に長期間に亘り、計り知れない影響を与えていくことになるものと思われま

振り返りますと、2010(平成22)年は、厳しい経済情勢のなか、両法人とも順調に業績を上げ、経営基盤の強化に努めた年でした。

同年4月、こころとからだの元氣プラザは「アジュール竹芝総合健診センター」の運営を東京都職員共済組合より受託することとなりました。大きな一歩だと

*本部長：尾身茂 自治医科大学教授、名誉WHO(世界保健機関)西太平洋事務局事務局長

思います。

また、拡大する需要にお応えするため、食品検査を担う日本橋研究所は2012(平成24)年度に竣工予定の豊海センタービル(仮称)へ移転を予定しております。

おかげさまで、両法人ともに着実に一定の収益を計上することが可能な状況となっているわけですが、強調したいことは、収益を上げることがこの事業の最終的な目的ではない、ということです。

なぜ、収益を上げなければならないか。

この財団法人、医療法人が長期的に社会に貢献していく、人びとの幸せに貢献していく、そこに目的があるわけです。

当財団および医療法人社団の基本理念は、「すべての人びとのいのちと環境のために尽くす」ということです。

東京顕微鏡院は、明治の細菌学者、遠山椿吉医学博士が120年前に創業し、36年かけてその基盤を築き、財団として後世に託したわけですが、戦後に再建された当財団がこれまで実践してきた保健衛生の事業は、すべての人びとに分け隔てなく、健康ないのちと、これを保てる生活環境を作り上げる、という

ことです。このことを究極の目標として、2003(平成15)年、当財団の保健医療部門は医療法人社団「こころとからだの元氣プラザ」として独立させましたが、その後も引続き両法人一体経営を行い、それぞれが自立した経済活動を続けながら、一般事業および公益事業を推進しています。

さて、遠山椿吉博士は、幕末の1857(安政4)年に生まれ、明治、大正、昭和を生き、関東大震災を経て事業を復興・拡大させ、71歳の生涯を閉じました。皆さんもご存知の司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」で有名な秋山好古も、およそ70年間に亘り、ほぼ同時代を生きています。

明治という時代、坂の上の青空に輝く一つの白い雲があったとすれば、120年前に遠山博士の見た白い雲は何だったか。それは、おそらく健康なこころとからだ、食と環境の安心安全、一言で言えば“健やかないのち”ではなかったでしょうか。

「すべての人びとのいのちと環境のために」を理念に掲げる私たちにとって、記念すべき120周年が大震災と共に幕開けしたということも、何かの歴史の巡り合わせと感じます。

われわれは、この困難な時期にこそ決して怯むことなく、創業時に遠山椿吉博士が掲げた白い雲、すなわち“人びとの健やかないのち”を、職員の皆さんと共に将来にわたり追求していきたい、との思いを強くしています。

この創業の精神を忘れることなく、両法人を食品の安全、環境衛生や予防医療、健康増進を通して、さらに大きく社会に貢献できる立派な法人に発展させていきたいと心から念願しています。

平成23年 5月

財団法人東京顕微鏡院 理事長

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長



山田 匡通

学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当財団創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。授賞式では、賞状、記念品、副賞100万円を授与し、記念講演およびレセプションを開催しています。



遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞

本賞は、地道に社会への貢献を迫及する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

平成22年度は、生活環境衛生と、食品の安全を重点課題としました。シックハウス、アスベストやダニ、カビなど室内環境、ビル衛生、飲料水の安全性、水と感染症の問題といった生活環境衛生の課題、また、残留化学物質、天然有毒・有害物質、食品添加物、食品アレルギー、器具・容器包装および食品媒介微生物に関する調査研究や分析法の開発といった食品の安全の課題などを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

選考の過程

2010(平成22)年1月から学会・関連媒体等を通して募集告知を始め、6月末日には15件のご応募をいただきました。一つひとつが、非常に優れた研究内容であり、研究分野も多岐にわたるものでした。



選考プロセスは、一次・二次・選考委員会という3つのステップで執り進めました。一次審査で10名に絞り込み、二次選考では、各委員に5つの軸で五段階評価を付けていただき、選考委員会において本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を重ねて受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論を踏まえ、当財団・医療法人合同の経営会議で、お二方の受賞が決定しました。

遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞



塩見 一雄 (しおみ かずお)

国立大学法人 東京海洋大学 教授

「魚介類アレルギーの同定と分子生物学的性状の解明
ならびに検査法開発に関する研究」

副賞 100万円

遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞 特別賞

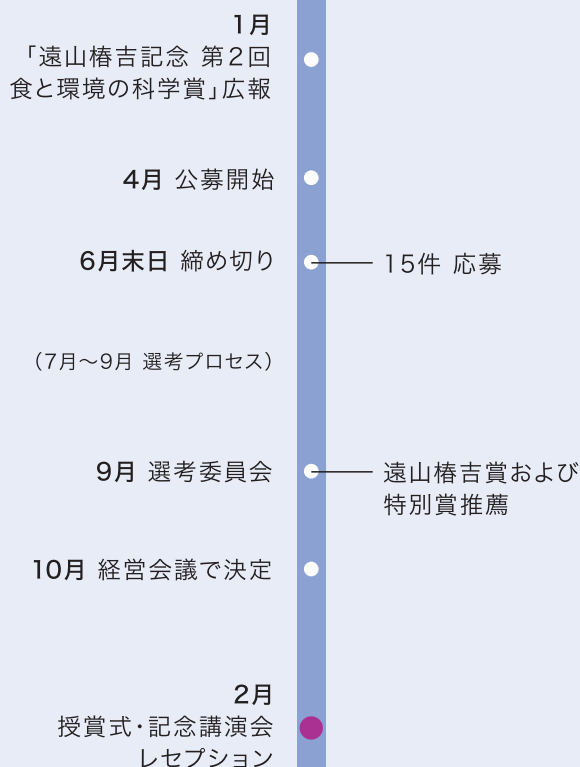


小泉 昭夫 (こいずみ あきお)

京都大学大学院
医学研究科環境衛生学分野 教授

「食と環境の難分解性環境汚染物質の長期モニタリング」

副賞 50万円





創立者 遠山椿吉(とおやま ちんきち)

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年東京医科大学撰科に入学し、衛生学および微生物学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顕微鏡』『東京顕微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日遠逝。享年71歳

2月8日 遠山椿吉賞授賞式

「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2011(平成23)年2月8日(火)にホテルメトロポリタン エドモント(東京・飯田橋)にて開催されました。授賞式には、選考委員の先生方を始め、研究者、報道関係者ほか当法人関係者など、およそ100名が祝福に集まりました。

山田匡通理事長は、「東京顕微鏡院が創業されて、今年120周年を迎えます」と述べ、塩見一雄先生の業績の学問的な深さと臨床現場に対する貢献についてふれ、小泉先生の業績がわが国の環境施策に貢献し、地域環境汚染源対策に実績を挙げたことに言及し、「このたびのお二人の研究成果は、この記念すべき年の遠山椿吉賞に誠にふさわしいと深く感銘を受けた次第です」と、結びました。

平成23年度は、「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を選考顕彰いたします。

受賞者あいさつ (抜粋)

塩見 一雄氏 1990年代前半、魚介類のアレルゲン研究は欧米中心で、わが国では皆無に近い状況でした。魚介類の消費量が多いわが国で魚介類アレルギーが問題になることは間違いない、この問題は医療現場の対応だけでなくアレルゲンに関する基礎研究が必須である、魚介類アレルゲン研究は水産分野が担う責務がある、という思いで研究をスタートした次第です。

研究成果の蓄積により、魚介類アレルギーをアレルゲンの面から理解できたことで、アレルギー表示制度の充実に多少なりとも貢献できたと思います。多くの皆様の多大なるご支援、ご協力の賜物と感謝申し上げます。そして何よりも、研究室で日夜こつこつと実験に励んできた大勢の学生さん達の汗と涙に対して格別の敬意と謝意を表するとともに、受賞の喜びを分かち合いたいと思います。

今後とも引き続き、魚介類による健康危害の防止に向けて微力を尽くして参りたいと申し述べて、受賞の挨拶の結びとさせていただきます。

* * * * *

小泉 昭夫氏 食の安全確保のため、国際的協調の中で多くの施策が導入されていますが、諸外国で規制外の物質の不正使用、特に環境で分解を受けない有機フッ素化合物や、使用が禁止されているDDTやメラミンなどは捕捉できない可能性があります。適切なリスク管理および将来予測のため行った我々の主な研究成果は、食事及び血液や母乳など生体試料バンクを継続発展させて、1)難分解性有機フッ素化合物、臭素化合物の汚染の検出と汚染源の解明、2)アジアでの環境および生体試料のモニタリング、3)地球規模のコンピューターによるモデルによって環境試料およびヒトにおける生体試料中濃度の予測であります。

今回の特別賞受賞は、地道に研究を続ける環境研究者達に希望を与えるもので、新たに研究の意義を再認識することで、若い研究者が育つものと思います。原田浩二准教授、新添多聞研究員をはじめとする我々の教室員一同とともに、この喜びを分かち合いたいと思います。



山田匡通理事長より塩見一雄氏に遠山椿吉賞を授与



小泉昭夫氏に遠山椿吉賞特別賞を授与

選考委員長講演 柳沢幸雄 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 教授



選考委員長講演:柳沢幸雄 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 教授

祝辞 竹内俊郎 日本水産学会会長、東京海洋大学理事・副学長



祝辞:竹内俊郎 日本水産学会会長、東京海洋大学理事・副学長



受賞記念講演:塩見一雄氏



受賞記念講演:小泉昭夫氏



受賞記念講演全景

*平成22年度「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」授賞式について詳細は、当財団ホームページをご覧ください。

●撮影協力:栗山 実

◆ 選考委員長講評 (抜粋)



柳沢 幸雄

東京大学大学院
新領域創成科学研究科 教授

塩見一雄先生のご研究は、魚介類の安心・安全の確保を目指して、魚介類のもつ有害成分に関する研究に長年取り組んでこられた成果ですが、中でもわが国の魚介類消費量の多さから魚介類アレルギー研究に先見の明を持って着手された革新性、アレルギー予防とアレルギー患者のQOL向上に多大な貢献をされた社会性・公益性に着目しました。

このたびの重点課題には、「食品の安全に関する調査研究やこれらの分析法の開発など」と示されております。塩見先生のご研究は、甲殻類特異的アレルゲンの発見、その検出法の開発、およびアレルゲンの除去法の開発など包括的であり、食の安全を守り危害を未然に防ぐ点で社会的貢献度が高く、このたびの受賞に最もふさわしい研究テーマであると結論いたしました。

遠山椿吉賞は、一名を顕彰することになっておりますが、

今回ご応募いただいた中に、見過ごしにできないご立派な研究成果がありました。小泉昭夫先生のご業績です。

小泉昭夫先生のご研究は、多くの食料を海外に依存しているわが国の実情に鑑み、環境で分解を受けない有機フッ素化合物やDDTやメラミンなど難分解汚染物質について、食事および血液や母乳など生体試料バンクを構築して系統的、継続的にモニタリングを行い汚染の進行を証明してこられました。

小泉先生のご研究は、我が国のみならず、アジア各国での経年変化とともに国際間比較も行い、社会へ警鐘を鳴らしてきた点で、社会的貢献度が極めて高いという評価に一致しました。そこで選考委員会では、長年にわたる地道な研究によって、公衆衛生の向上に貢献されてきたことに深く敬意を表し、特別賞に推薦した次第でございます。

選考委員長として、この遠山椿吉賞が、今後とも多くの優れた研究者の業績に光をあて、その偉業を公に称えることで、次世代を担う後進の育成にもつながれば誠に幸いだと思います。魚介類アレルギーに関する研究をされてきた塩見一雄先生、また、特別賞として、難分解環境汚染物質のモニタリングを長期に亘って行ってこられた小泉昭夫先生の受賞に、こころより、お祝い申し上げます。

◆ 来賓祝辞 (抜粋)



竹内 俊郎

社団法人日本水産学会 会長
国立大学法人東京海洋大学
理事・副学長

塩見一雄先生は、東京海洋大学に奉職以来、イソギンチャクやオニヒトデなど海産動物のペプチド毒を含むタンパク毒に関する研究や魚介類に含まれるヒ素やカドミウムといった有害元素の代謝に関する研究を行ってこられました。

今回の受賞テーマについては、厚生労働省が1996から1999年度に実施した「食物アレルギーに関する調査」よりも前から、魚介類のアレルギーに関する研究に着手しており、塩見先生はこの分野の研究における中心的な役割を担っております。

特に、エビやカニなどの甲殻類のアレルゲンに関する検査法の開発は、厚生労働省通知法指定の甲殻類検査法として採用されており、公衆衛生分野における貢献度が極めて高いといえます。また、魚肉の練り製品化によるアレルゲンの除去、甲殻類や貝類のエキスにおけるアレルゲンの低減化は食物アレルギー予防とアレルギー患者のQOL向上に多大な貢献があります。

塩見先生は、研究成果を数多く公表するだけでなく、高校生

や一般にも魚介類アレルギーに関する知識の啓蒙に努められております。

以上の点において今回の授賞は、公衆衛生、特に食品の安全分野における塩見先生の多大なる貢献に対して誠に時宜を得たものと言えます。

次に、小泉昭夫先生は、東北大学への助手奉職以来、血液、食事、母乳を用いて難分解性環境汚染物質の継続モニタリングを実施して参りました。特に、1980年代から一貫して、日本、中国、韓国、ベトナムにおける血液などの生体試料を用いて、アジア各国間における経年変化と国際間の比較を行っております。

今回の受賞テーマは、継続モニタリングにより、急激な体内への暴露の増加がみられるものをいち早く察知し、汚染源の特定を行い、行政の諸施策策定につながる基礎データを整えることを目的とした内容で、極めて国際的であり、今日的、かつ重要なテーマといえます。

これらの成果として、大阪府の環境行政を通じて地域環境汚染源対策を行い、実績をあげていることは特筆に値します。

このように、今回受賞されたお二人のご研究は、遠山椿吉博士の生き方や精神を受け継ぐものであり、「食と環境の科学賞」受賞に大変ふさわしい内容といえます。お二人の先生に対して、改めて敬意を表しますとともに、今後のさらなるご研究の発展をお祈りし、お祝いの言葉といたします。

学術振興

学会・研究会への助成活動、医師や職員による研究発表

東京顕微鏡院は、1989(平成元)年4月以降21年間にわたり「日本食品微生物学会」の事務局機能を担うなど、保健衛生分野における学術振興に努めています。また、医事衛生の研究及び振興に資するため、医師や職員による調査研究活動に力を入れています。

◇学会活動

①「日本食品微生物学会」への助成

「日本食品微生物学会」は、食品の微生物に関する学術研究の推進と、食品の安全及び機能向上への寄与を目的とした国内唯一の学会です。食品の安全や品質管理に係る微生物検査や研究を担う各専門分野の方々の情報交換を目的として昭和55年に発足した「食品衛生微生物研究会」を前身とし、以来30年以上にわたる活動の歴史があります。



第31回日本食品微生物学会学術総会

日本食品微生物学会30周年学術総会・ランチョンセミナー(平成21年10月20日(火)タワーホール船堀)で当財団伊藤武理事が講演した「食品関係従事者の腸管系病原微生物検査の意義と検査方法」スライドは、当財団HPにて公開しています。

(TOP>公益事業>日本食品微生物学会)

②日本食品衛生学会 公開講演会

「食品の安全・安心とリスク」をテーマとした公開講演会(平成21年11月10日(火)日本教育会館(一ツ橋ホール))において、当財団伊藤武理事が「最近の食品事故について～主に微生物～」について講演を行いました。講演録は、同学会および当財団HPにて公開しています。

(TOP>食品等の検査>トピックス)



平成21年11月10日 日本食品衛生学会

◇医師や職員による調査研究

①「子宮頸がん検診者におけるHPV感染者の把握とTypingの調査・研究」

代表者:石井保吉(医社)こころとからだの元氣プラザ 臨床検査部 部長



遺伝子検査機器

近年20代、30代の女性に子宮頸がんが急増している。子宮頸がん検診者における細胞診断で疑陽性以上の再検者にHPV-DNA検査を実施し、前がん病変の検出の有効性を学術的に検証する。特殊疾病の研究事業としてDNA検査機器を導入し、今年度より3年間で研究報告を行う。

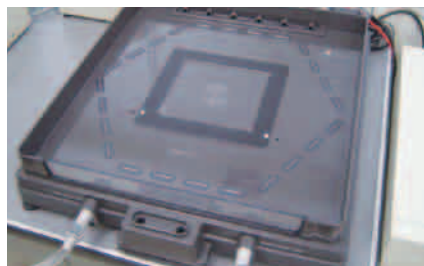
②「尿中ミオイノシトールの実用化に向けた応用研究」

代表者:山縣文夫 当財団理事

糖尿病専門医の河津捷二医師の指導の下、平成12年から継続している旭化成ファーマとの共同研究。実用化に向けた応用研究として、今年度は職員ボランティアを募り、糖負荷試験と内視鏡検査の並行実施、食事負荷試験の施設及び自宅での実施結果を比較し、施設外実施の可能性を検討した。

③「パルスフィールドゲル電気泳動による衛生指標菌の疫学的解析」

代表者:和田真太郎 当財団食と環境の科学センター 調査研究室 主任



PFGE泳動槽

食品メーカー等の衛生管理システム向上に資するため、衛生指標菌や病原菌検査について遺伝子レベルの疫学解析でその有用性を研究した。

④「檜原村民に安全でおいしい水を提供するための基礎調査」

代表者:箭内慎吾 当財団食と環境の科学センター 環境衛生営業部 部長



採水(檜原村)

食品衛生管理手法であるHACCP(危害分析需要管理点方式)の考え方に従い、水源から蛇口までの水の安全性をモニタリングし、檜原村民に安全でおいしい水を提供する。これまでは原水(沢水)の理化学的試験と微生物学的試験を実施してきた。

※以上4件の研究報告は、当財団平成22年度事業年報にて掲載予定。

普及啓発 (健康セミナー)

“こころ”と“からだ”の健康のために

平成20年度から3年連続して『健康日本21*』に基づく健康セミナーシリーズを展開。「人生80年代」に健やかな老後を過ごすため、働きざかりから始める健康づくりを重点課題として、「健康寿命の延伸」や「生活の質の向上」に役立つ講演会を企画しています。今年度は「休養・こころの健康づくり」「アルコール」「がん」「栄養・食生活」のテーマに焦点をあてました。

※21世紀における国民健康づくり運動

① 健康に関するセミナー

◎ シリーズ「働きざかりから始める、人生80年代の健康づくり」全3回
(会場はすべて女性と仕事の未来館)

◆ 9月10日「働き世代の疲労対策 疲れのメカニズムとセルフケア」
(参加者数:303名)

講師:倉恒弘彦(関西福祉科学大学教授、東京大学特任教授)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、中央労働災害防止協会



「疲れ」は痛みや発熱と同様、体の異常を知らせるサインの一つです。わが国での疲労の科学的究明は世界をリードしており、現在、疲労を客観的に評価する方法(血液や唾液の検査など)の確立が進められています。



基調講演では、長年、疲労に関する研究に携わり、現在、厚生労働省疲労研究班の代表研究者である倉恒弘彦先生に、疲れの原因と心身への悪影響のメカニズム、疲労回復の方法など、現代のストレス社会における疲れとの上手な付き合い方をお話いただきました。

◆ 10月28日「静かに広がる、働き世代のアルコール問題!～依存症にならないために」
(参加者数:209名)

講師:加藤眞三(慶応義塾大学看護医療学部教授) 樋口進(国立病院機構・久里浜アルコール症センター副院長)

司会:及川孝光(こころとからだの元氣プラザ統括所長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、中央労働災害防止協会、日本アルコール・薬物医学会、日本アルコール関連問題学会、日本アルコール精神医学会



日常生活の中では様々な飲酒機会がありますが、現在、働く人の中でアルコールの問題が静かに広がりつつあります。身体的・経済的・社会的な問題を引き起こすだけでなく、うつ病などの精神的問題や自殺にも大きく関連しているアルコール依存の予防をテーマにしました。



基調講演では、内科医の立場から加藤眞三先生にアルコールの及ぼす身体への影響についてお話いただき、アルコール依存症の専門病院で長年治療と研究に取り組まれている樋口進先生より、過度のアルコール摂取による心身両面への影響やアルコールに対する正しい知識など、アルコール依存症にならないためのセルフコントロール術をご紹介いただきました。



また、フリーディスカッションでは、当法人の及川統括所長の司会で、職場のアルコール問題について掘り下げ、参加者の期待に応えました。

◆ 11月30日「ここまでわかった! 食生活改善とがん予防」

(参加者数:388名)

講師:津金昌一郎(独)国立がん研究センターがん予防・検診研究センター予防研究部長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会



がん予防に対する関心の高さから、シリーズ最高の参加者数となりました。1981年以来、日本人の死因のトップは「がん」。2004年のデータに基づく、日本人の2人に1人は、生涯でがんにかかるものと推計されています。予防の観点から、近年、食生活とがんのリスクについての研究が進みつつあり、最新の情報を啓発しました。



基調講演では、長年、がん予防に関する研究に携わり、現在、厚生労働省研究班の主任研究者である津金昌一郎先生に、これまでの科学研究から明らかになった日本人の食生活とがんの関わり、がんのリスクを高める食品や予防効果のある食品はあるのかという話題、さらに、そうした情報の受け止め方などをご紹介いただきました。

(全3回シリーズの講演内容を、講師の先生方のご理解・ご協力により、小冊子に編集しました⇒P10)

普及啓発

(食と環境のセミナー)

身近な食や環境の問題について

ライフスタイルの変化により、冷凍食品など加工食品の利用が増加する一方で、その食品表示のわかりやすさが問題となっています。安全な食を求める消費者の声にお応えする「食品表示」シンポジウムを開催しました。また、企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーは20年以上にわたって開催しており、最先端の食や環境の情報提供に努めています。

② 食のシンポジウム

◆12月11日「食品表示を学んで、食生活に役立てよう!」

(会場:新宿明治安田生命ホール)

参加者数:251名)

講師:山本宏樹(日本冷凍食品協会 常務理事)
梅垣敬三((独)国立健康・栄養研究所 情報センター長)
堀口逸子(順天堂大学医学部公衆衛生学教室・医学博士)
中村祥典(消費者庁食品表示課 課長補佐)
モデレーター:日和佐信子(雪印メグミルク株式会社 社外取締役)
後援:消費者庁、東京都、日本栄養士会、東京都栄養士会



パネルディスカッションでは「食品表示を上手に利用するにはどうしたらいいのか?」と題し、消費者庁食品表示課の中村祥典氏を交え、「食品表示をどのようにして食生活に役立てるか」をテーマにディスカッションし、賢い消費者としての目を養うポイントについて理解を求めました。(当シンポジウムの講演録を制作しています。)



オープニングトークにて、長年消費者運動に取り組まれてきた、日和佐信子先生よりシンポジウムの主旨と狙いをお話しいただいた後、基調講演にて、食品表示の現状と食品安全を山本宏樹先生、健康・栄養情報や健康食品との付き合い方を梅垣敬三先生、アレルギー表示を堀口逸子先生にそれぞれお話しいただきました。



③ 食と環境のセミナー

(会場は全て日本橋社会教育会館)

◆第76回 食と環境のセミナー(7月7日)
「平成21年度 我が国における食中毒発生状況と問題点」講師:熊谷優子(厚生労働省 医薬食品局 食品安全部 監視安全課 食中毒被害情報管理室 室長)

「EUにおけるHACCPを中心とした衛生管理について」講師:豊福肇(国立保健医療科学院 研修企画部 第二室長)

(参加者数:181名)

◆第77回 食と環境のセミナー(9月7日)
「新型インフルエンザの総括と今後の課題」
「国の対応」講師:岡部信彦(国立感染症研究所 感染症情報センター センター長)

「企業の対応」講師:山下安信(日本マクドナルド株式会社品質管理統括部 統括マネージャー)

(参加者数:92名)

◆第78回 食と環境のセミナー(12月7日)
「ウイルス性食中毒と対策」

講師:森功次(東京都健康安全研究センター 微生物部 ウイルス研究科)

「国内および諸外国における家畜・食品由来の薬剤耐性菌と今後の課題」

講師:浅井鉄夫(農林水産省 動物医薬品検査所 検査第二部) (参加者数:139名)

☆参加者の声を反映した セミナーづくりで高い満足度を めざしてまいります。

セミナーでは事前に参加希望者からアンケートを取り、聴衆の構成や講演に関する疑問や関心点を講師にお伝えし、講演内容に反映させています。

セミナー開催後のアンケートでは、すべての講演で多くの来場者から満足な内容であった旨の回答をいただきました。(来場者の声:一部抜粋)

○「働き世代の疲労対策 疲れのメカニズムとセルフケア」

・新しい視点からの健康へのアプローチ方法で、興味深く拝聴しました。

(女性 30代 会社員)

・「疲労」という抽象的・感覚的な症状を具体的・客観的に表現しようという先進的な試みと技術の進歩に驚きました。

(男性 40代 会社員)

○「静かに広がる、働き世代のアルコール問題!~依存症にならないために」

・職場の男性上司に聞かせたい人がたくさんいます。職場では飲み放題の飲み会はやらない方がいいと思いました。

(女性 40代 会社員)

・アルコールに関して誤解している部分がたくさんあり、非常に勉強になりました。

(女性 20代 教員)

○「ここまでわかった!食生活改善とがん予防」

・食生活からのがん予防の研究が進んでいることがわかりました。

(男性 70代 会社員)

・日本と世界の比較データが多く、面白く聴くことができました。

(女性 30代 会社員)

○「食品表示を学んで、食生活に役立てよう!」

・食品メーカーにて、表示を担当していますが、今回は消費者視点で色々考えることができて、とても参考になりました。

(30歳代 女性 会社員)

・普段の仕事(栄養担当)でも質問の多い分野なので、とても参考になりました。

(40歳代 女性 管理栄養士)

出版関連

幅広く健康・生活情報を提供

平成20年度より、「健康日本21」に基づくセミナーシリーズ「働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり」の講演内容を小冊子にし、さらなる予防医療の普及・啓発に努めています。また、「食品と環境」衛生講座シリーズでは、企業のリスク管理の視点から指南する実践的なシックハウス対策や、食品従事者を対象に衛生管理を行う上で不可欠な食品微生物検査をわかりやすく解説した小冊子を発行しました。

■働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり ⑦～⑨

疲れのメカニズムと疲労回復方法、アルコール依存症にならないためのセルフコントロール術、これまでに分かっている食生活改善とがん予防の関係など、からだの不調を予防するために、自分でできる健康づくりをご紹介します新シリーズです。



新刊 発行日:平成23年4月 サイズ: A5版
ページ、発行部数: ⑦48ページ/1,600部 頒価 250円
⑧50ページ/2,200部 頒価 300円
⑨32ページ/2,100部 頒価 250円

- ⑦「働き世代の疲労対策 疲れのメカニズムとセルフケア」
倉恒 弘彦 (関西福祉科学大学 教授)
- ⑧「静かに広がる、働き世代のアルコール問題! ~依存症にならないために」
加藤 眞三 (慶応義塾大学看護医療学部 教授)
樋口 進 (国立病院機構・久里浜アルコール症センター 副院長)
- ⑨「ここまでわかった! 食生活改善とがん予防」
津金 昌一郎 (国立がん研究センター がん予防・検診研究センター 予防研究部長)

■バックナンバー

セミナー会場での頒布や、ホームページを通して日本全国からお求めいただき、また、集合教育の副教材などにも活用いただきました。人気のシリーズに成長しています。

○働き盛りから始める、人生80年時代の健康づくり ①～⑥

- ①「元気な高齢期は一日にしてならず」
折茂 肇 (健康科学大学学長)
植木 章三 (東北化学学園大学 医療福祉学部保健福祉学科 教授)
- ②「男と女の更年期-ケアとつきあい方」
堀江 重郎 (こころからだの元気プラザ 前立腺・PSA 外来担当医)
小田 瑞恵 (こころからだの元気プラザ 診療部長)
- ③「睡眠障害とこころの病~事例と対策~」
井上 雄一 (財団法人神経研究所附属睡眠学センター センター長)
- ④「働きざかりから始める歯周病対策 生活習慣病の黒幕 ~それは歯周病!」
和泉 雄一 (東京医科歯科大学大学院 歯学総合研究科歯周病学分野 教授)
- ⑤「働く人のストレス対策 ~うつを防ぐセルフケア~」
保坂 隆 (東海大学医学部教授 精神医学)
- ⑥「メタボ・うつと睡眠障害 予防と対処法」
井上 雄一 (財団法人神経研究所附属睡眠学センター センター長)

○脱メタボリックシンドローム大作戦

- 第①弾:「健康サラサラ生活7カ条」
林 潤一 (杏林大学医学部総合医療学教授)
- 第②弾:「ウエストを縮めるための食生活改善」
中村 丁次 (神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部学部長)
- 第③弾:「メタボ脱出はライフスタイル・ウォーキングで!」
泉 嗣彦 (こころからだの元気プラザ特定保健推進グループ指導医)

※事業年報以外の出版物は 当財団HPよりご購入いただけます。

■「食品と環境」衛生講座シリーズ ②～③



新刊

発行日:②平成22年8月
③平成23年1月
サイズなど: A5版
②23ページ
③24ページ
発行部数:各1,000部
頒価:200円

②「リスク管理としてのシックハウス対策」

瀬戸 博 (当財団 食と環境の科学センター 環境衛生検査部 部長)

企業や学校のリスク管理としての視点から、不動産関係業者、学校関係者などを対象に、シックハウス対策となる実践的なノウハウを提供しています。

③「食品微生物検査を知ろう～食品従事者の皆様へ」

伊藤 武 (当財団 食と環境の科学センター 理事)

食品従事者を対象に、食品の安全性確保のための細菌検査の必要性、検査方法や精度管理などについてやさしく解説しています。

■バックナンバー

- ①「結婚式場におけるノロウイルス食中毒対策」
伊藤 武 (当財団 食と環境の科学センター 理事)

■平成21年度事業年報

事業案内および年次データベースとして制作しています。本年度は付属のCD-ROMに年報全編と検査データ編、「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」の受賞記念講演録も収録し、適宜、必要ページの抜き刷り対応にするなど、活用促進を図りました。



新刊

発行日:平成22年8月30日
サイズなど: A4版、186ページ
本編・データ編CD-ROM付属
発行部数:1,000部
配布先:契約先、関係行政機関、
関係研究機関、関係団体など

公益事業については、下記を掲載しました。

〈平成21年度公益事業研究報告〉

- ①「パルスフィールドゲル電気泳動による衛生指標菌の疫学的解析」
- ②「動物飼料中のエストロゲンの分析法の検討」
- ③「檜原村民に安全でおいしい水を提供するための調査」
- ④「性・年齢を考慮した基準値と従来の基準値による人間ドックデータ判定結果の比較検討」(抜粋)

〈遠山椿吉賞講演録〉

- ・「高齢者の生活機能の維持・向上と介護予防を目的とした包括的健診の開発と普及についての調査研究～超高齢社会における新たな健康維持と予防医療へ向けての科学的取組み～」 遠山椿吉賞受賞 鈴木隆雄
- ・「国際標準化を通じた国内臨床検査室の脂質測定精度の向上とその臨床研究・疫学研究・公衆衛生施策への応用」 遠山椿吉賞特別賞受賞 中村雅一

インターネット による 情報提供

食と環境、健康に関する情報発信とメールマガジンの運営・管理

120周年を迎える平成23年4月1日をゴールに、平成22年度は東京顕微鏡院のホームページをリニューアルしました。食品と環境衛生の「トピックス」を見やすく整理し、衛生思想の普及啓発の向上を図りました。また、元氣プラザのホームページでは、暮らしに役立つ健康情報、食の安全と生活環境衛生の知識の啓発を目的として、毎月一回メールマガジンを発行しています。

■ホームページのリニューアル

普及啓発向上のため、東京顕微鏡院のホームページをリニューアルいたしました。

トップページのデザインを一新し、アクセシビリティの向上を図り、またページ内のコンテンツを整理して、これまで発信してきた食や環境衛生に関する情報（トピックス）を検査項目別に分けて、閲覧しやすくいたしました。



(リニューアルした東京顕微鏡院HP)

■メールマガジンによる普及啓発

メールマガジン「元氣プラザだより」は、本年度、3つの連載をスタート、予防医療により注力した内容としました。

- ・「ドクターが教える、健診結果の読み方」
- ・「はたらく人のこころの健康相談室」
- ・「食事と運動!自分でつくる健康生活」

元氣プラザの医師やカウンセラー、管理栄養士の執筆による分かり易いコラムに人気が集まり、読者の拡大につながりました。

また、「食と環境衛生のコラム」を充実



(元氣プラザHPより)



(東京顕微鏡院HPより)

させ、健康食品、食中毒、においビジネスや空気清浄機など身近な話題から、シックハウスやノロウイルス食中毒の傾向と対策など、幅広くご紹介しました。

発行数は、平成22年3月号の1,556名から、平成23年3月号の1,758名へと堅固に伸びています。

平成23年度も、より多くの方に健康な毎日を送る知識を提供する「健康生活応援メルマガ」として、更なる拡大を目指しています。



(元氣プラザだより 月別購読者数)

■広報を通じた予防医療の啓蒙活動

○ananカラダサポート (雑誌ananの新ケータイサービス)

女性に体調の自己管理にお役立ていただくため、生理周期による健康管理ができる携帯コンテンツ「女性のための健康サイトananカラダサポート」について、医療情報の監修に協力しました。

生理周期を基にした体調の自己管理ツールや、元氣プラザ女性外来で診療を行う3名の医師が執筆する「女性のからだの健康トピックス」、Q&A形式の医療情報などにより、普及啓発を行っています。



ananカラダサポート 執筆コラム:
『ドクター相談室』における「健康トピックス」
「検診のススメ」「お悩み相談」
連載期間:平成23年2月~平成23年7月
主な購読層:20代~40代女性
提供:HUDSON
マガジンハウス

(ananカラダサポート トップ画面)

○四季のけんこう (季刊)

家庭の中で起こりがちなメンタルヘルスの問題について、元氣プラザ「こころの相談室」のカウンセラーが4回連載で執筆を行いました。

介護、不登校、職場復帰など、家庭内で具体的に対応するためのポイント解説を盛り込んだ企画とし、産業医活動の中でもご紹介したところ、多くの反響がありました。

今後、メールマガジン「元氣プラザだより」に掲載し、当法人ホームページを通して広く情報を提供していく予定です。



連載期間:平成22年度
春・夏・秋・冬号(4回)
発行部数:58,000部×4回
主な購読層:社会保険加入者
発行:社会保険出版社

(四季のけんこう 冬号)

地域貢献

次世代を担う子どもたちへ

平成18年より5年連続で日本橋研究所近隣の小学校5・6年生を対象に「夏休み子ども研究者体験」セミナーを実施し、また、平成19年より4年連続で千代田区立九段中等教育学校の課題解決学習に協力しています。
次世代を担う子どもたちを対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

■平成22年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー

白衣を着て、手についた菌や食べ物に含まれる色を観察しよう！

～試してみよう！色の変化でわかる検査～

後援：中央区教育委員会

参加校：有馬小学校、泰明小学校、月島第一小学校、月島第二小学校、月島第三小学校、豊海小学校、久松小学校、明正小学校、日本橋小学校、京橋築地小学校、佃島小学校

■A日程：7月29日(木)～30日(金)

■B日程：8月5日(木)～6日(金)



明治時代、多くの死者を出した伝染病から人びとのいのちを守るため、東京顕微鏡院は、顕微鏡検査技術者の育成を担い、衛生思想の普及啓発を行ってきました。そのスピリットを受け継ぎ、本年度も地域貢献活動「子ども研究者体験セミナー」を小学5～6年生を中心に2回開催しました。これまでは、日本橋研究所周辺の3つの小学校を中心に参加募集を行ってきましたが、5年目となった今回のセミナーは中央区16小学校の中から、11校の参加(2回合計30名)がありました。



本年度は、これまでの食品微生物関連の研究に、新たに食品理化学関連の検査を加えて、プログラムを一新。身近にあるものの「色」の違いをきっかけに、食品の衛生と安全についてさまざまな発見をした二日間でした。



紫キャベツやターメリックから色素を取り出し、それを使って酸性・アルカリ性を調べる試験紙を製作しました。また、チョコレートの着色料をペーパークロマトグラフィーで分離して、色の成分の違いを比較したり、分光器を作って、色が違って見える理由を確かめました。



また、本年度は「食品検査見学ツアー」を組み込みました。現場で働く職員から、各種の検査機器や食品のカビを培養したサンプルの説明を受け、安全な食品が販売されるまでには、様々な検査があることを実感できたようです。

参加した子どもたちからは、「普段できない実験ができた」「学校では写真をみるだけの太陽光スペクトルを初めて自分の手で作ることができてうれしかった」「普通は見られない検査室の中も見せてもらえておもしろかった」「手を洗う前のほうが、



洗った後より菌が少ないことがあり、驚きでいっぱいでした。小学生対象なので来年は参加できませんが、また来たいと思いました」など、多くの発見と感動にあふれる声が聞かれました。

■地元中学の校外学習に協力



11月26日、九段中等教育学校*における総合的な学習の時間「都市文化」の一環で1年生5名が来社しました。今年の課題は、清水正幸部長(健康づくり事業部)が出題。「新しい健康診断を提案してみよう」と問いかけました。

*全国初の区立の中高一貫6年制学校



続いて元氣プラザ各階を見学。放射線科では柳田裕子部長・重松綾科長にレントゲン検査について、細胞診の検査室では石井保吉部長にがん細胞の見分け方を学びました。



生徒たちは2ヶ月間授業でこの課題に取り組み、1月21日に元氣プラザで発表を行いました。アンケート調査から、多くの人が必要と認めながら面倒と感じる実態を踏まえ、低コストで受けやすい健診を提案しました。

組織の活性化

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの抛り所に

公益事業は当財団の基幹事業であり、また共通の歴史的ルーツをもつ当医療法人の精神基盤としても重要です。

創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

■公益委員

私たちの公益事業は、両法人合同の月例公益会議で討議され、透明性をもって運営されています。

平成22年度は、公益セミナー運営のほか、ワーキンググループを組織し、公益事業スタッフと協働でプロジェクトの企画・運営に取り組みました。部門横断的なコミュニケーションを通して風通しのよい企業風土を醸成し、組織活性化に生かしています。

平成22年度公益委員は、以下の皆さんが任命されました。(五十音順)

- ◎東京顕微鏡院：金子旬一、川崎千珠子、田原麻衣子、平賀真基、森哲也
- ◎こころとからだの元氣プラザ：秋沢陽一、菅頭淳、草薙貴子、立田志づか、沼畑瑞穂、野中由美子

■ワーキンググループ活動

○公益ニュースレター「Leap」

編集委員として、「質のよい健康診断を40万人へ巡回健診」「皆の仕事と経営を結ぶ一経営管理」「食中毒を未然に

防ぐ腸管系病原菌検査」「室内空気環境検査」に光をあて、紹介。創業精神(公益スピリット)の顕在化と一体感の醸成に努めました。



発行：2010年夏、2011年冬
サイズなど：A4版 12ページ(増刊号16ページ)
発行部数：各1,500部

○次世代を担う子どもたちへの衛生教育

東京顕微鏡院は、公益委員を中心に調査研究室、食品微生物および食品理化学部門の協力を得て企画内容を刷新しました。元氣プラザ親子セミナーでは、昨年に続き、職員の子弟を対象に予防医療の意義を親子で学ぶ体験学習セミナーを開催しました。

- 夏休み子ども研究者体験セミナー
(詳しくは、本誌P12ページ)

●元氣プラザ親子セミナー

(詳しくは、本誌P14ページ)

○財団HPリニューアル

(詳しくは、本誌P11ページ)

○小冊子「食品と環境」衛生講座シリーズ

(詳しくは、本誌P10ページ)



公益会議
キックオフミーティング



遠山椿吉賞授賞式
受付



シンポジウム会場
受付



「Our Credo」公益会議メンバーの共通認識を文章化し、これを抛り所とした活動を積み重ねています。



私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

運営方針

多くの人の知恵を集めるとともに、公益会議における意見交換を通して、より良い公益事業の実現に努めます。

公益委員は、自らの仕事で得た知見から、公益会議で意見を述べ、セミナー運営や、ワーキングプロジェクトに参加し、職場と公益事業活動の橋渡しに努めます。

公益事業室スタッフは、公益事業を企画し、公益会議で説明し、公益委員との議論を通して公益会議で得た意見を、より良い公益事業の創造と運営に生かします。

公益委員

- ・自分の日々の仕事をこなすだけでなく、その仕事のなかにある「公益性」を考えます。
- ・自分の仕事と「公益性」の関連から、公益事業を構想し、その公益事業の実現に努め、社会に貢献します。
- ・この考えを周囲に、波及させていきます。



「すべての人びとのいのちと環境のために」
For Life and Environment of All People.

組織の活性化

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの拠り所に

公益事業は当財団の基幹事業であり、また共通の歴史的ルーツをもつ当医療法人の精神基盤としても重要です。

創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

■120周年事業

平成23年4月キックオフする120周年事業の一環として、1年前からこれに取り組み、120周年告知活動を通して社内の活性化に努め、記念シンポジウムのテーマを検討しました。

○120周年スローガン

(平成22年7月募集～8月決定)

社内応募を募り、90作品から全職員投票による一次選考後、二次選考委員として8件を選抜し、最終選考に進めました。

○120周年ロゴマーク

(平成22年8月募集～10月決定)

社外から応募のあった388作品から、公益事業室による一次選考後、二次選考委員として6件を選抜し、最終選考に進めました。



120周年ロゴマーク

○120周年記念グッズ

ボールペン、エコバック、クリアファイル、バンドエイドセットのデザイン案にコメントを提供し、最終選考に進めました。



120周年記念グッズ

○120周年記念シンポジウム

超高齢社会が生む21世紀最大の疾患の一つ、アルツハイマー病をテーマとすることを決定しました。

「アルツハイマー型認知症の予防戦略—研究・医療・ケア最前線から(仮題)」

◎日時：平成23年10月1日(土)

11:00～17:30(予定)

◎会場：日経ホール

◎定員：610名

□司会：松下正明(東京都健康長寿医療センター理事長、東京大学名誉教授、東京大学精神医学総合研究所名誉所長)

□講師：岩坪威(東京大学大学院教授)、杉本八郎(アリセプト開発者、京都大学大学院客員教授)、朝田隆(筑波大学精神医学教授)ほか

■公益事業レポート2009

公益事業の年次ディスクロージャー誌として発行しました。ステークホルダーの皆様に対して、当財団・医療法人の公益事業の情報開示に役立てられています。

本年度は、創業120年を目前に「社会との対話」と題する特集ページを追加しました。



内容：
・公益事業報告
・特集「社会との対話」
山崎光夫(新田次郎賞作家)
×
山田洋輔(当財団理事)
発行日：平成22年5月17日
サイズなど：A4判 20ページ
発行部数：1,500部

●平成22年度夏休み「元氣プラザ 親子セミナー」

白衣を着て検査技師を体験しよう!

～パプリカ君とみかんちゃんの健康診断～

◎参加者：当法人で働く関係者・親子 ◎講師：公益委員・健康支援部

◎日程：7月24日(土) 元氣プラザ 1・3・4階 ◎参加者数：24名



細胞診検査



運動指導



食事指導



検体ゼリー

X線検査



生理機能検査



血圧測定



今年も両法人で働く皆さんを対象に、公益委員の企画による夏休み親子セミナーを開催しました。小学生を対象に、健康状態を調べる検査技師体験ができる専門性の高い企画です。

今年度はセミナー用「検体ゼリー」を開発し、同一検体をX線と超音波検査で調べた画像の違いから、さまざまな検査の価値を実感できるものとなりました。

また、より健康に過ごせるヒントを家庭に持ち帰ってもらおうと、健康支援部の協力で新たなプログラムが追加されました。歩数を増やすコツ(運動指導)や野菜の大切さ、砂糖をとりすぎないポイント(栄養指導)を親子ゲームやクイズ形式で楽しく学び、健康づくりに役立つ充実した一日となったようです。

参加した親子からは、「人の体の検査はこんなふうに行うということがわかりました」「本当のお医者さんになれた気分です」「超音波検査とX線検査の違いが、わかりやすく解説されていたのには、子供も大人も興味津津でした」などの感想がありました。

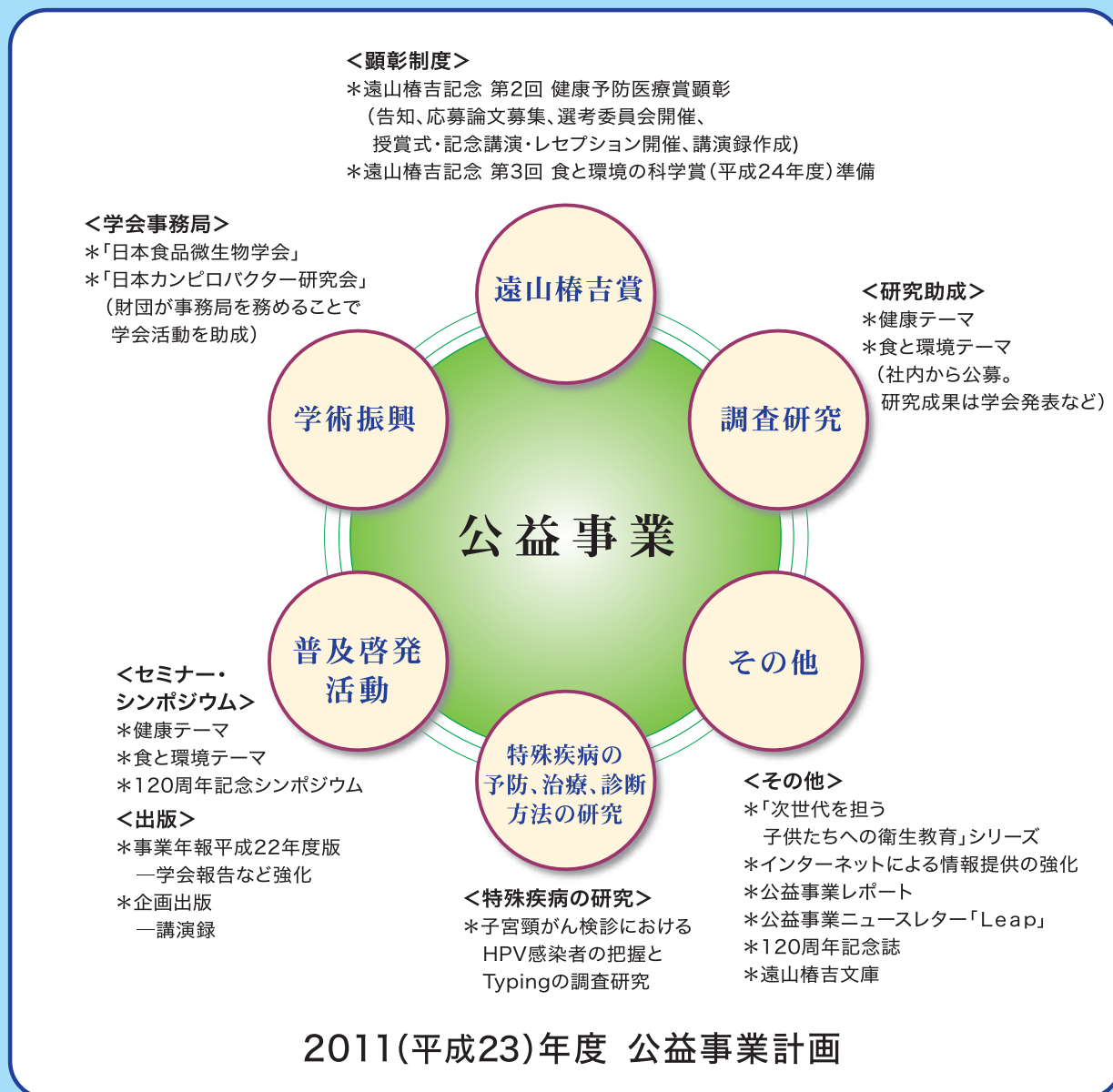
◇東京顕微鏡院、および ころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業～3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、ころとからだの元氣プラザの主な動き	【戦前】	普及啓発活動、出版、その他公益事業など
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始	1800年～ 1891(明治24)年	
病原的細菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売		
細菌検査の実務指導を行う講習科を開講	1892(明治25)年	
名称を東京顕微鏡院と改称		
種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	1894(明治27)年	機関誌「顕微鏡」第1号発行 啓蒙用幻灯映画製作
飲料水の検査を開始	1895(明治28)年	「顕微鏡の祖」マルビギー200年記念式典、本院にて挙行
母乳検査を開始	1896(明治29)年	コレラ講習会を開催 回帰熱講習会を開催
事業拡大にともない、神田区小川町に移転	1899(明治32)年	ベスト講習会を開催
	1900年～ 1903(明治36)年	
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる		
ベスト試験室を新設		
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される		
保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始	1907(明治40)年	来日したコッホ博士を囲む生花の会(於帝国ホテル) 前列左から ロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士 後列左から2人目が遠山椿吉
遠山椿吉院長、東京市より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる。		
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を囑託(翌年帰国)		
遠山椿吉院長、内閣より医師開業試験委員を命ぜられる。	1908(明治41)年	遠山椿吉院長、来日したロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士を招待し、生花の会を開催
(院長、長年来の研究による)脚気治療薬うりひんを製品化	1914(大正3)年	「結核予防善悪鑑」発行、「結核征伐の歌」を発表
	1915(大正4)年	
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失	1921(大正10)年	創立30年を記念して、『遠山博士脚気病原因之研究』発行
9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、10月1日一般業務を再開	1923(大正12)年	
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1927(昭和2)年	
遠山椿吉、肺がんのため逝逝享年71歳	1928(昭和3)年	
レントゲン深部治療開始	1929(昭和4)年	脚気の無料診療を開始
	1930(昭和5)年	第1回脚気無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)
戦災により、以後10年にわたり事業中断	1935(昭和10)年	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
	1945(昭和20)年	
	【戦後】	
遠山正路院長より事業を継承	1954(昭和29)年	
診療所を開設、細菌検査所を再開	1955(昭和30)年	
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始。	1967(昭和42)年	
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大		
東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1972(昭和47)年	
建替えによる新院舎完成。人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録	1974(昭和49)年	
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設	1975(昭和50)年	
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)	1979(昭和54)年	
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61)年	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」開催
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62)年	学術普及誌「健康と環境」創刊(～2000年)。
	1991(平成3)年	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」開催
	1992(平成4)年	シンポジウム「ベイブリッジフォーラム'92-21世紀への対がん戦略」開催
	1993(平成5)年	琉球大学、西会津町役場とともに福島県西会津町住民の健康調査を実施(～1993年)
	1996(平成8)年	事業年報の発行開始
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設(2001、2002、2005年に順次拡大)	1997(平成9)年	シンポジウム「新時代の高血圧管理」「職場と住宅環境を考える」などを開催
立川事務所を開設。食品等分析調査研究所を合併(1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1998(平成10)年	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催
会員制人間ドックを開始	2000年～ 2001(平成13)年	創立110周年記念日米メディカルシンポジウム「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」開催
食と環境の科学センター-日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大	2002(平成14)年	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」開催
トータルヘルスセンター-Be-Well、女性のための生涯医療センター-ViViを開設	2003(平成15)年	女性のための生涯医療センター-ViVi 開設1周年シンポジウム「アダムとイブの医療革命」開催
医療部門を統合・拡充し、医療法人社団ころとからだの元氣プラザを設立	2005(平成17)年	財団法人東京顕微鏡院創立115年、医療法人社団ころとからだの元氣プラザ創立3年記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催
	2007(平成19)年	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来-なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催
立川研究所を一ヶ所に統合拡大	2008(平成20)年	遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設
ころとからだの元氣プラザ(飯田橋)とヶヶ本院の施設再配置		
ころとからだの元氣プラザ(飯田橋)外来診療と女性のための生涯医療センター-ViViを統合	2009(平成21)年	「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、同奨励賞を川崎晋氏に授与 遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム「東京の水の源流を探る～豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水～」を開催
ころとからだの元氣プラザ、アジュール林芝総合健診センターの運営を受託(4月12日にオープン)	2010(平成22)年	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、同特別賞を中村雅一氏に授与
臨床検査部がころとからだの元氣プラザの組織に移行。		
三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2011(平成23)年	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、同特別賞を小泉昭夫氏に授与
		遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞 (右:塩見氏 左:小泉氏)

■歴代代表者と在任期間 創立者(院長) 遠山椿吉 1891～1928年 第2代(院長) 遠山正路 1929～1954年 第3代(院長) 細谷省吾 1955～1957年 第4代(院長) 高橋悌三 1957～1967年 第5代(理事長) 山田匡蔵 1967～1989年 第6代(理事長) 山田和江 1989～1995年 第7代(理事長) 下村満子 1995～2007年 現理事長 山田匡通 2007年～

Our Credo 私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。



2011(平成23)年度 公益事業計画

発行:

財団法人東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 www.kenko-kenbj.or.jp

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 www.genkiplaza.or.jp

問合せ先: 三橋 祥江 制作: 水戸 純一、田中 栄治、飯島 敏樹 デザイン: 金沢 謙児

2011.5.18 発行